

読んでみました

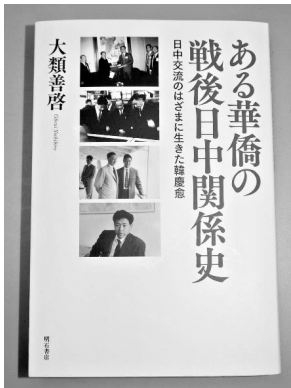
大類善啓著

# 『ある華僑の戦後日中関係史』

石飛 仁（会員）

本書は、歴史に翻弄された残留華僑の苦悩する姿を真摯な筆致で描いた好著である。

2年前、当協会の講演会に、日中戦後交流史の裏方をつとめ続けた本書の主人公、韓慶愈氏をお招きして日中交流史の知られざる逸話を語ってもらった。両国関係を歴史の事実と踏み込んで考えるべき時期にきたという思いがあったからである。私自身は、戦後ずっと放置されていた4万人の中国人強制連



行「花岡事件」（1945年7月1日に発生）を追跡調査し、その上で日中共同声明の意義を讃える立場で、加害企業に対して直接、償いを求める交渉を開始していた。（詳しくは小著『花岡事件鹿島交渉の軌跡』彩流社）

謎の多い敗戦直後の日中混線時代の真の姿を捉える観点から、韓慶愈氏が満洲留學生の立場で複雑な戦後処理史に絡んだ事実

に注目したのである。氏は45年8月8日、満洲国政府から帰国船に乗るよう命じられ、新潟港から帰国の途に着いた。その船は、本土決戦の補強を担うために日本軍の精鋭暁部隊が軍需機械設備を満洲国に移すための、十艘からなる船団であった。ところが船上でソ連

連軍の軍事力を知っており、本来なら一気に手薄な防衛の最前線に急行しなければならぬのに、この船団は前進を止めてしまった。

徘徊するまま1週間後の8月15日、船上で日本敗戦が知られる。周囲は落胆する悲壮な日本人ばかりだから、留學生たちは内心こみ上げる喜びをかみ殺し、下を向くことを申し合わせ

てその場をやり過ごした。翌日、船は敦賀港に入り、留學生たちは日本にとめおかれた。敗戦の混乱の中で食料を求めて京都から東京へ、そして盛岡へと移る。そこへ崩壊した満洲国の官吏が救済にやって来て一人ひとりに帰国費用等生活費を渡される。私が注目したのは、彼がその

軍の参戦が知られると、船団は海上を彷徨いはじめ（ノモンハンの体験を持つ日本軍はソ連軍の軍事力を知っており、本来なら一気に手薄な防衛の最前線に急行しなければならぬのに、この船団は前進を止めてしまった。）

後、北海道旅行をして、戦時下に「華人勞工」として華北から連行されてきた中国人労働者の群れに出会い、収容所のような彼らの飯場を訪ねたことだ。彼は満洲国留學生華僑として、敗戦直後の日本にあって中国語新聞の記者となり、進駐してきた蒋介石政府の代表部とも接触し、国際軍事法廷（東京裁判）も傍聴し、「花岡事件」の体験者でBC級戦犯（横浜裁判）の証人として残っていた瞿樹棠とも親交を結ぶ。中国人4万人強制連行（「華人労働者移入政策」閣議決定）の国家犯罪については、当時は戦犯容疑を恐れて極秘にされていたから誰もが知らぬことだったのだ。

対日戦勝国の一員として敗戦国日本に乗り込んできた国民政府の「中国代表部」がきわめて脆弱だった一方で、満洲留學生韓慶愈の戦後奮戦記は、真の日中交流史を把握する上で極めて貴重なものとなっている。

（明石書店・2300円＋税）